

宗教と科学の進化・統合

——東洋の宗教とユング心理学の持つ意味——

半田 栄一

はじめに

二十一世紀を迎えて、十九、二十世紀と科学技術を基礎として経済の限界のない発展を求めてきた現代文明は、今や環境破壊、核戦争の危機などによって袋小路に入り込み、人類を存亡の瀬戸際に追いつめた。

現代文明を発展させた原動力となったものは科学とそれが実用化された技術であり、この根底には主観と客観、精神と物質を二元的対立において捉える近世デカルトの哲学がある。これが近代以降の科学的な捉え方や原理の基礎となったといえるのであるが、さらにヨーロッパにおける科学・技術の発展にはキリスト教的世界観がその基礎となっていることを踏まえてはならない。

即ち唯一絶対にして超越的存在である創造主としての神と理性

的な存在として創られた人間、そして自然という図式である。神から与えられた理性の権限によって対象の自然を観察し、実験して得られた結果（法則）を技術として実用化することによって科学技術文明は急速に発展して、二十世紀には人間の生き方をも大きく変えてしまったといえるであろう。

近代以降、科学はその母胎となったキリスト教から離れて全く独立した物質中心の科学技術文明として発展し、人類共通の有用性ということにおいて普遍的価値を得てきた。宗教を離れ、生産技術、医療、交通、通信、情報等の分野における飛躍的に進歩した科学技術は人類に極めて大きい利便性、安全性、功利性をもたらしたが、同時に環境問題、人間疎外等の害悪をもたらした。また物質的欲望の肥大化と精神的価値の荒廃の原因ともなり、モラルの危機や様々な心身の病氣や犯罪をも生んでいる。

そして、近代、現代の科学技術の発展は宗教と科学の対立をもたらし、これは既に近世において、キリスト教が捉える世界観である天動説を覆し、コペルニクス、ガリレイにより地動説が主張されることにおいて始まる。さらに近代に至りダーウィンは聖書の「創世記」における、神が人間（アダムとイヴ）を創造したという説を覆し、人間はアムエバから段階的に生物の進化の過程を経てきたとする進化論をとり、キリスト教の教義や神学と対立することになる。

近代化にともない科学的合理主義が民衆まで広がっていくにつれて、これまで信じられていた病気なおしの呪いや方角による占い、様々な祈禱などは迷信として否定されていった。このことは迷信に頼り治癒せず死んでいった人々が近代医学によって救われるようになったという点では、近代の成果として評価してよい。

そして、これまで価値あるものとされてきた呪いや占い、宗教的祈禱などは価値の低いものとして蔑視され、始まりにおいて宗教的異端とされた科学は近代に至って逆に高い価値が与えられたのである。近代以降の宗教と科学の対立は科学の優位のもとに始まった。

また啓蒙期ドイツのカントはその批判哲学において人間の認識の範囲をア・プリオリな時間・空間の感性形式と悟性のカテゴリによってとらえられる現象に限定したが、自由・霊魂・神という超経験的理念を实践理性の要請として認め、人間は物自体に属

する理性的かつ自由な存在で道徳律に自律的に従うとした。

このカントの立場は近代以降における科学と宗教の状況とこの対立をどう統一するかということに一つの示唆と問題提起を与えている。

一 近代医学における心身観と心理学

近代の医学や心理学を通してその心身観について考えると、その原点はデカルトの心身二元論に行きつく。即ち心理現象、精神と身体を切り離して捉えてきたのである。これはまた同時に、主体としての医者や研究者が客体（対象）としての人体や心理現象を捉えようとする態度の基礎ともなった。

近代医学の研究は既に中世に始まった、対象としての人体の解剖を基礎とした。このことは部分（パーツ）の集合によって人間の全体を捉える人間機械論に繋がる。解剖学が対象とするものは死体であり、切り離された部分であるから生きた生命全体とその働きを捉えることはできない。

ここに近代以降の医学の基本的な性格ができたといえる。即ち、人体の部分を対象化して観察や実験によって客観的に捉えようとするものであるが、このことによって生きた生命の全体を捉えることよりも人体の部分をより細分化して捉えるようになり、医学自体がより分析的となつて専門による分化を生じた。この生命の全体性を見失った現代の医学とそれに基づく医療が様々な矛盾と

問題を引き起こしているのである。

この点については精神医学や心理学についても同様であり、人間の心を対象化することによって始まった。心理学においては外的に捉えられた心理現象の観察、即ち刺激を与える実験においてその反応を観察することによって病氣の原因を探り、診療を行った。心理学は哲学から離れ、臨床とも異なる実験心理学を中心として発展した。

一方、精神医学も心の病氣の原因を主として「脳の病変」に求め、一般の医学と同様に解剖学的研究に比重が置かれた。こうした傾向は現代の精神科医療にも続いており、治療は薬物の投与と脳外科の手術が中心となってきた。ところが人間の心の病氣は脳や神経の器質的な障害のみによって起こるのではなく、様々なストレスや不安、抑圧、緊張などの心因によって起こることが多いのであり、こういった治療に対する薬物投与や手術は対症療法という面が大きく根本的な治療につながらず副作用や後遺症も問題となる。

脳の解剖学的研究では明らかにならない心の病氣の原因を、因性という観点から捉えて新しく発展したものが「精神病理学」で、ヤスパースやシュナイダーらによって基礎づけられた。病氣の本態や構造を精緻な観察や面接により明らかにしようとするものである。

また二十世紀の初めに、これまでの意識心理学が要素への環元

とそれらによる構成と総和によっていたのに対して、部分や要素よりも全体性の優位を自然科学的方法によって捉えようとするゲシュタルト心理学がヴェルトハイマーらのベルリン学派によって主張されたことは、実験心理学のなかにありつつも一つの進歩であったということができよう。

しかし、なによりも現代の精神医学や心理学の動向を考える上での大きな進展はフロイト、そしてユングを中心とした精神分析学や深層心理学の登場であり、これらが脳や神経の解剖学的方法のみでは捉えきれない「心」の問題に光を当てようようになる。

フロイトも最初はシャルコーらについて神経学や神経解剖学の研究を行うが、それだけで説明のつかない現象が催眠によって引き起こされることに関心を持ち、深層意識に潜む抑圧された感情や欲求等のしこりを解き放す「カタルシス」による心理療法を行ったほか、自由連想法や夢分析を行い無意識を捉え理論化していったのである。

解剖学に基礎づけられた実験心理学的立場から無意識の領域へと踏み込んだことは近代心理学の革命といえるであろう。

二 ユングと東洋の宗教

フロイトの生物学主義（リビドー説）を乗り越えて袂を分かったユングは、無意識を個人的無意識と普遍的あるいは集合的無意識に分け、特に後者は人類全体の無意識や自然や宇宙的生命にも

通い合う個人の心の根源であることを示そうとした。

これは影、アニマ・アニムス、老賢人、自己等の元型として表象され、神話、夢、精神病者の妄想、未開人の心性等と共通するのであり、精神分析および夢や神話の分析によって明らかにされた。こうした分析は治療者と患者との面接（カウンセリング）によって行われるのであるが、対象としての患者を外に置いて観察するのではなく、治療者と患者の共同の心理体験を通して了解し、感じ、読み取るのである。

ここには現代の医療や教育が見失った体験を通して全人格的交流、治療者と患者、教師と生徒の相方向性が存在する。クライアント中心療法をつくったカール・ロジャースも治療者から患者への一方向的な治療ではなく、患者自身の「気づき」を目指した²。

またソクラテスも知識を与えるのではなく、対話を通して弟子自らたましいに根ざした真の知に目覚めることを目指した。「たましい」の教育であったといえる。

このことは道元の面授や嗣法についてもいえる。修行と悟り即ち只管打坐と身心脱落は師から弟子への知識や技術の授受によって教えられるものではなく、身心を介した全人格的な体験を通して行われる。宗教的体験（修行と悟り）を共にすることにによって、相互に心の奥深くの真実に通い合うようになることによる。

真の仏法を伝授すること即ち「嗣法」は師から弟子に一方的に物を与えるように行われるのではない。絶対的体験を通して仏の生命に触れること、その体験の共有において行われるのである。悟り（脱落体験）において、師と弟子は仏法の真理において結ばれる（一如となる）といえよう。『正法眼蔵』における「相嗣」という語はこのことを示している。仏が仏に法を伝え、仏が仏から仏法の真理を授かるのである。「ほとけ、仏にさづけてよこしまなることなき……」であり、「仏、仏相嗣するがゆへに、仏道はたゞ仏の究尽にして、仏にあらざる時節あらず。たとへば、石は石に相嗣し、玉は玉に相嗣することあり、菊も相嗣あり、松も印証するに、みな前菊後菊如如なり、前松後松如如なるがごとし。」とこのことを説いている。そして嗣法は師と弟子が直接対面する面授によって行われる。

ここにおいて禅と心理療法におけるカウンセリングに共通する点を指摘することができよう。禅における宗教的体験を通して法を授ける指導者と法を受け取る弟子という二元的対立や隔ては越えられ師子共に成長、発展するのだが、この禅における教育の過程は種々の禅問答において知ることができる。

これらの問答を通していえることは禅特有の論理によって語られるのであり、多くは日常的な形式論理を超える矛盾や逆説が使用され、思惟の相対性を越えた、絶対的体験の真実を示し、共にその自覚を得るのである。それは形式的、相対的論理を超えた

超論理ともいうべきものである。⁴⁾このような絶対的体験である身心脱落、悟りは主・客二分のいわゆる分別知によってとらえられた世界や様々な煩惱や苦しみからの解放であり師子共に真の自由と生命の飛躍をうるのである。

心理療法におけるカウンセリングにおいても治療者と患者はそれぞれの立場にありながら深い人格的な関わりによって結ばれる。治療者は患者を客体として対象化するのではなく、両者が相互に深い関係において出会い交わるることによって行われる。治療者と患者が深く抜きさしならない関係になったとき、患者が治療者の夢を見たりすることがよくある。そして治療者が患者の置かれた状況に共感したり、患者がこれまでの人生で深い影響を受けた親や恋人などの役割を治療者が引き受ける転位やその反対の逆転位の現象も生じてくる。このような過程を経て、カタルシスや人格の成長や新たな自己の確立である変容などが起こるが、これは治療者と患者の隔てを越えて、両者が深く交わるとき、無意識を通して心理体験を共有することによるのである。

ユングがカウンセリングの中で体験した「スカラベの黄金虫」⁵⁾に関した、「意味のある偶然の一致」である共時性体験（シンクロニシティ）も自・他、主・客の対立を超えた変性意識状態が関わっており、宗教的情動、ヌミノース的体験を大きな要因とし、物理的世界と心理的世界が連続するところに発生する。

道元における「自受用三昧」や「身心脱落」の体験即ち悟りも

自他の対立を超えた絶対一如の境地であり、時間と空間の相対性や因果性は超越される。道元が、如浄の坐睡する僧を叱る声によって身心脱落したこと、箒の先にあたる石の音によって悟った香厳智閑や桃の花を見て悟った靈雲志勤の例も長い継続的修行の末、機が熟することによって自他一如の絶対的境地に至ったのである。

悟り（身心脱落）のあり様を道元は「自己をはこびて方法を修証するを迷とす、万法すゝみて自己を修証するはさとりなり。

……自己をわするゝといふは、万法に証せらるゝなり。万法に証せらるゝといふは、自己の身心をよび他己の身心をして脱落せしむるなり。」と説示しているが、この立場こそ人間と自然、宇宙との本来の関係、姿であり、特に西欧中心に発達した主・客（自他）の対立の原理を基盤とした現代の科学技術文明が失ったものといえよう。この現代科学の一分野として発達した精神医学や心理学、とりわけフロイトやユングを中心とする分析心理学、深層心理学は患者を客体とする実験観察によっては心の本来の姿をとらえることができず、治療者と患者が深い心の交わりを通して無意識レベルで関わらなければならない。

既にユングは夢や妄想の分析を通して、そこに神話との共通性を見出し、患者の描いた絵からマンダラへの関心を持ち、易と共時性体験に関する捉え方などにはユングと東洋の宗教への深い関心と影響があったといえよう。特に自然科学における継時的因果

性を越えたところに起こる共時性体験が瞑想や宗教的な絶対体験即ち主・客の合一に基づいた変性意識状態（トランス）によることは、科学の一分野として始まった近代の心理学がその発展の中で人間の心の無意識を含めた全体を捉えようとする過程で、科学と宗教の間に新たな通路を見出すに至ったといえる。

現代の心理学は病気を治すことを主な目的とする傾向に対し、第三の勢力といわれる人間性心理学は、人間が生きていることの価値やよろこびに関わる自由や創造性、そして自己実現についてマズローを中心として展開した。マズローにおいては、人間は自己実現をめざす存在として捉えられ、自己実現のプロセスにおいて至高体験と呼ばれる心理体験があることが示される。これは法悦感や絶頂感といった日常における体験から、悟りや宇宙との合一といった超越的な体験、即ちエクスタシーの体験までを幅広く含むものであり、瞑想や東洋の宗教、神秘主義も視野に入ってくる。実験や観察によって心理現象の一部のみを捉えたり、その病的な部分を治療することを目的とするのではなく人間の心を全体として一つの働きとして捉えようとしたのである。

共時性も道元の禪における身心脱落体験も共に自我（エゴ）は超越されより大きな自己へと変容される。悟りは無意識下の力が意識に働きかけて意識と無意識の統合を通して魂の新生（変容）をもたらす。これは無我の境地において意識の受動的状態（トランス）において我でないものに導かれる。元型の活性化と普遍化

である。道元において悟りは個々の行を描いて現実化されないのと同じく、ユングの共時性も個人的傾向に基づいているのである。道元禪もユング心理学も共に個々の人格において、時空を超える絶対的体験や共時性体験によって自我を超えて自他一如の真の自己を見出す個性化であり、自己実現の道といえる。

心理学における第四の勢力といわれるトランスパーソナル心理学は、現代科学技術文明を支えた近代的自我の主観性や個人性を超えて人類共通の無意識や宇宙の意識に繋がることを志向するユングをはじめ、スタニスラフ・グロフやケン・ウィルバーを中心として新たな発展をみせている。これは人間性心理学における至高体験をも超えて仏教的な悟り、現代宗教や瞑想におけるエクスタシー体験、古代のアニミズムやシャーマニズムの体験および世界観・宇宙観を変性意識によって捉えようとする。

やはり単にセラピーを目的とするのみでなく人間の本来のあり方（人間と自然、宇宙との関わりという点において）の回復を志向している。こうした宗教的な体験（禪、ヨーガ、瞑想、シャーマニズム等）における身心脱落や忘我の境地において自然も自己も本来の姿を現す。自我を超えた自他一如の境地において宇宙的生命（仏性）に結ばれる。仏教などのこうした捉え方は西洋心理学における主体と客体の対立における捉え方（実験・観察）と異なり、体験のリアリティーが核となっていてトランスパーソナル心理学と一致する。

また現代のホリスティック医学も、患者を対象として捉えて対症療法中心になっている現代医学の矛盾を乗り越え、東洋における宗教的な修行の体験や直感に基づき、長い経験の積み重ねによって原理を得た気功や鍼灸、アーユルヴェーダ、整体、心理療法、心身医学等と現代の医学を再統合しようとしている。これは心身・体観に基づき心と魂をも含めた人間の全体性の回復を志向するが、同時に自然や宇宙と通い合う生命の全体をも捉える⁹⁾。

教育においても知性のみならず、感性や身体性を重んじ魂を含めた全人格的成長を目指すシュタイナーやホリスティック教育もこの同一方向の流れにあるといえよう。

むすび

科学的合理主義が支配する時代に人間の無意識に着目し、心理療法を通して意識と無意識の統合による人格の変容を目指したユングの果たした役割は大きい。特に共時性は心理現象と物理現象の連続という点において科学と宗教の新しい統合の道を示している。心と物質、心と身体、主体と客体という二元性の超越は新しい医学や科学において志向されている。今、極度に発達し独走する科学技術を人類が道具としていかに管理し使用していくべきかを問う倫理が何よりも求められているがこの倫理は宗教的な体験に基づいた叡智によらなければならない。

二十一世紀における霊性のあるべき姿は古代のシャーマニズム

やアニミズム、オカルト等に退行、逃避するのではない。これらが理性を失い、独走すれば狂気となり危険なカルト集団ともなる。道元の語を用うるなら「思量」も「不思量」も超えた「非思量」即ち悟りに裏づけられたロゴスこそ必要なのだ。「道得」として語られねばならない。合理性と非合理性の真の統合が必要であり、それは言語と論理によって表現されなければならない。古代からの多くの宗教も合理性と非合理性のせめぎあいを行い、その統合によって叡智を見出ししてきた。ソクラテスにおいて魂の配慮が説かれたが、既にソクラテス以前の哲学者たちは、自己の生命と自然の中の力に同一性を見出し、タレスは「水」の語によってアルケーでありブシケーであるものを語った。ここでは、人間や神と自然は対立しない。日本人の宗教意識の根底にある、自然の中に力としての生命を見出し、人間と連続していると捉える生命観は、神道をはじめ、最澄、空海ほか日本仏教の基盤となった。これは道元の宗教的自然観や親鸞の「自然」の思想等にも流れており、個を超えた全一の生命への帰一、自他一如である。

今、科学はこうした宗教的意識や体験に根ざした叡智に基づいて、人類は宇宙の調和の中に生かされて存在すること、そのために奉仕するものに進化すべき時である。この叡智こそ、ユングが意識と無意識の統合によってめざしたところに結実し、科学と宗教に進化と調和をもたらす。カントのいう必然の現象界において人類の生んだ科学技術をいかに使用するか、それは物自体に属す

る人間の自由な道徳的判断に委ねられるのであり、それは自己と宇宙の一如性を悟る「靈性」に基づいた新たな倫理による以外ない。

を前提としている。

(はんだ・えいいち、日本倫理思想史、

嘉悦大学非常勤講師)

- (1) 医学研究の分析的傾向や医療の専門の細分化を生じ、患者の対象はインフォームド・コンセントの成立を阻む。
- (2) ロジャースはキリスト教神学を基礎としており、そのことからユングと同じくたましいという立脚点があった。
- (3) 以下『正法眼蔵』よりの引用は寺田透、水野弥穂子校注『道元』上下、岩波書店による。
- (4) こうした回答は『正法眼蔵』『道得』『葛藤』などに述べられている。師と弟子が対面し、悟りのリアリティーを互いに確認し合う。この時、言語と論理は、体験に根ざして真理を指し示す道得である。拙論「道元における表現と論理」『比較思想研究』第一六号参照。
- (5) 共時性に関しては拙論「道元における「出会い」とユング・共時性」『比較思想研究』第一九号参照。
- (6) A・H・マズロー著 小口忠彦訳『改訂新版 人間性の心理学』産能大学出版部、一九九〇年。
- (7) キリスト教神秘主義(エックハルト等)、道元の「万法に証せらるゝ」、「仏のかたよりおこなわれ」るあり様などもここに通じている。
- (8) 『正法眼蔵』『山水経』『溪声山色』が示している自然がこれである。
- (9) ここではなによりも、数量化した患者のデータでなく、心身一体の医療者と患者の人格的交流こそが大切となる。
- (10) 中国の気功、道教、インドのヨーガなども、人間と宇宙の繋がりを